

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

——因幡の白兔が欺いた和邇を中心に——

黄 當 時

〔抄 録〕

『古事記』に因幡の白兔の説話があり、白兔が和邇を欺く場面がある。騙された和邇は兔の皮を剥いだ、と記されているが、事実ではない可能性がある。私たちは、どこまでが事実でどこからが事実でないかを見極めねばならない。さもなければ、解析結果は、当然ながら、信頼度の低いものでしかない。

和邇は、適切な海の民の視点を欠いたままでは、正確に解けない。言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点到少しでも近づけ、和邇は大型のカヌー（の関係者）であることを解明することができた。古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、ポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 因幡の白兔、和邇、加良奴、加良怒、異文化接触

1. はじめに

『古事記』に因幡の白兔の説話があり、白兔が和邇を欺く場面がある¹⁰¹⁾。『広辞苑』（第五版、p.178）、『日本国語大辞典』（第二版、第一巻、p.1264）は、この説話をそれぞれ次のように説明している。

いなば-の-しろうさぎ【因幡の素兔】出雲神話の一。「古事記」所出。淤岐島^{おきの}から因幡国に渡るため、兔が海の上に並んだ鰐鯨^{わじ}の背を欺き渡るが、最後に鰐鯨に皮を剥ぎとられる。八十神^{やそがみ}の教えに従って潮に浴したためにかえって苦しんでいるところを、大国主命に救われる。

いなばのしろうさぎ【因幡の白兔】「古事記-神代」に見える出雲神話の一つ。隠岐国から因幡国へ渡るため、ワニザメを欺いて海上に並んだその背を渡ったウサギが、最後のワニザメに悟られて皮をはがれる。大国主命（おおくにぬしのみこと）の兄八十神（やそかみ）の教えて潮を浴び、いっそう苦しむが大国主命に救われて恩返しをする。インド、南洋の説話の影響があるとされる動物報恩説話。

因幡の白兔が欺いた「和邇」は、一体何なのであろうか。

荻原浅男、鴻巣隼男1979は、件の個所を「故、海のわにを欺きて言はく」と読み下し、「そこで海の鮫（さめ）をだまして」と口語訳をしている（p. 93）。

荻原、鴻巣両氏は、和邇に付された訓注〔此二字以音。下効此〕を無視することなく読み下しではそつなく「わに」としたものの、さりとて、わに/ワニでは、実のところ、はっきり理解できているわけではないので口語訳では「鮫（さめ）」としたように見受けるが、如何であらうか。

誰しも、「和邇」が何であるのかが正確にわかりさえすれば解明の扉を開けられる、という見当はつく。「和邇」を鰐鮫と見なすのは、ワニではどうしても理解できず、手の出しようがないからではないのだろうか。海の経験の乏しい私たちに、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識等が不足してはいないのだろうか。

『古事記』は、和邇が兔の皮を剥いだ、と記述しているが、事実ではない可能性がある。私たちは、どこまでが事実でどこからが事実でないかを見極めねばならない。さもなければ、解析結果は、当然ながら、信頼度の低いものでしかない。

さて、日本には、いわゆる爬虫類の鰐は、大小にかかわらず、生息していないので、この「和邇」は、いわゆる爬虫類の鰐ではないらしい、と考えてよさそうである。恐らく、「ワニ」という音声、あるいは、「ワニ」に似た音声で呼ばれた何らかの生物/無生物だったのだろう、と考えてよいであろう。

情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。解析対象を、真偽を確かめ（られ）ないまま軽々に言い換えたり書き換えたりすることは、解析結果を誤る可能性があり、厳に慎まねばならない。このケースにおいて、根拠なしに、和邇を鰐鮫と言い換えたり書き換えたりするのは、解析結果を誤る可能性のある危険な行為なのである。担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、和邇はワニ、という認識を頭の片隅にきちんと置いて解析を行なうべきである。

和邇は、この説話が成立した頃の人々には理解が難しい言葉ではなかったはずなのに、後世の人々には何故理解できなくなったのであろうか。後世の人々は、言語の面で、その頃の人々と同程度の知識がないために理解できなくなった、という可能性があるが、如何であらうか。

私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性があるが、如何であろうか。和邇は、いわゆる海の民の言語であり、私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語についての知識がないために、その意味が正確に理解できない、という可能性があるが、如何であろうか。

陸の民の私たちは、いわゆる海の民のことについて判断する能力や知識を欠いているかもしれないが、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点に少しでも近づけることができれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識を入手できるのではないだろうか。この説話を残した人々の視点とは、いわゆる海の民の視点であるが、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになろう。

言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、さらに必要最小限の、いわゆる海の民の言語や文化に関する知識を入手しつつ、言語学的視点から、解析を進めていくことにしたい。

2. 有用な知見

2-1. 枯野、軽野

解析の手掛かりは、いわゆる海の民が用いたであろう言語であるが、取り敢えず、船舶の名称について考察しつつ、解析に必要な知識（装備）を少しばかり入手しておきたい。

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、僅かに二人の研究者が「枯野」船解明の過程で示した知見が有用と思われる。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』や『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の実住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます (ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」)。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」(マオリ語では、タウルア、TAURUA) と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、**「大きな・帆をもつ・カヌー」**

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、**「大きな・双胴のカヌー」**の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、**「大きな・カヌー」**の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であったことがらを言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語に

おける船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

2-2. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので²⁰⁵⁾、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰(四三三六)、伊豆手乃船(四四六〇)と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船(巻十二、三一七二)、真熊野之船(巻六、九四四)、真熊野之小船(巻六、一〇三三)、安之我良乎夫禰(巻十四、三三六七)などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、(四三三六)と(四四六〇)の歌は、次の通りである。

巻第二十(四三三六)²⁰⁶⁾

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ

巻第二十(四四六〇)²⁰⁷⁾

堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも

異文化の語彙(外来語)を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤 pí」や「卡 kǎ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない(例：扎啤 zhāpí、〔ジョッキに入れた〕生ビール；信用卡 xìnyòngkǎ、クレジットカード)。ところが、「啤 pí」や「卡 kǎ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒 jiǔ」や「片 piàn」を加えて、「啤酒 píjiǔ」や「卡片 kǎpiàn」とするのである。

「異文化の語彙(外来語)+類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古

代日本語にも見られる。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫称」や「舟」という類名を加えて、「手夫称」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、(四四六〇)では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約により一音節少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、(四三三六)で略称の「手」で詠まれた船は(四四六〇)では、音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。実際には、後置要素「乃」は略せても（前置要素「手」が略称として残る）、前置要素「手」は略せない（後置要素「乃」が略称として残ることはない）。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多層構造である。

例えば、女性の名前に、菊や雪があり、その派生形に、小菊や小雪、菊乃（野）や雪乃（野）、などがある。名付け親は、いずれも女の子に付けるのに良い名前、という認識はあり、菊や雪と小菊や小雪との意味（構造）の違いはわかるが、菊や雪と菊乃（野）や雪乃（野）との意味（構造）の違いは、わからないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃（野）の有無に意味の違いがあることは認識していないし、また認識できず、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、というくらいのことしか説明できないのではないだろうか²⁰⁹。

人名の乃（野）は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡であるが、今日まで受け継がれており、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手^て」としているが、「手^て」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り敢えず一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「手^た」と詠んでいた可能性を排除することができない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられしたりしていた、と考えてよい。このケースでは、歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか²¹⁰。

次は、(三一七二)、(〇九四四)、(一〇三三)の歌である。

卷第十二 (三一七二)²¹¹⁾

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて偲はぬ 月も日もなし

卷第六 (〇九四四)²¹²⁾

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船

卷第六 (一〇三三)²¹³⁾

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船に乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプの舟/船を指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の歌である。

卷十四 (三三六七)²¹⁴⁾

百つ島 足柄小舟 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙(外来語)+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995aでは、「真熊野之小船」の「小」に「を」のルビを振って「小^を」とし、同1995bでは、「安之我良乎夫祢」の「乎」に「を」のルビを振って「乎^を」としているが、「小^を/乎^を」は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船」や「乎夫祢」の正確な読みや意味がわからず²¹⁵⁾、取り敢えず「を」の訓みを一つ当てておいた、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「小^を/乎^を」と詠んでいた可能性を排除することができない。「小^を/乎^を」には、「を」と「こ」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「を」を書き記すのに用いられたり「こ」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

歌人はある船を「を」と詠み「小^を/乎^を」と書き記した、と考えるだけでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小^を/乎^を」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、

や、おみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあるのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」もしくは「こ」を書き記した（「を」もしくは「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、思慮に欠けるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語における船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。学者であれ研究者であれ、古代日本語の中に「こぶね」（或いは「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

このケースでは、歌人は「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表意に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまったても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したもの（書き記したもの）ということになるが、一体どのような言葉に由来するのだろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃（tau-nui）」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように（p. 142）、（四三三六）の「手（tau）」は（四四六〇）の「手乃（tau-nui）」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手（tau）」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎（kau）」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手、tau」が使われ、熊野や足柄では「小/乎、kau」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手、tau」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎、kau」と呼ぶ人々がいたことを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、後置修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの（kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野²¹⁶；tau-nui、手乃²¹⁷）と、後置修飾語の「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの（tau、手；kau、小/乎）があったことがわかる。

3. 異文化の語彙の表記

3-1. -漚

日本には、いわゆる爬虫類の鱧は、大小にかかわらず、生息していないので、和漚はいわゆる爬虫類の鱧ではなさそうだ、恐らく、「ワニ」という音声で呼ばれた何らかの無生物だろう、という見当はついていた。

先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「和漚」は「wa'a-nui」を書き記したものであろう。「フネ-大きい」という意味構造のポリネシア語「wa'a-nui」を、漢字が持つ表意機能と表音機能のうち、後者を利用して書き記したものであり、漢字が持つ意味は考慮する必要がない。

wa'a. n. 1. Canoe, rough-hewn canoe, canoemen, paddlers; a chant in praise of a chief's canoe.

nui. nvs. Big, large, great, greatest, grand, important, principal, prime, many, much, often, abundant, bulky;³⁰¹⁾

古代の出雲では、ある種の船を「和漚 (wa'a-nui)」と呼んでいたのである。

長い歴史の中で、多くのものが消されていくが、何かしら痕跡が残るものである。和漚という名称は、辛うじて残ったが、その意味はわからなくなってしまった。海の民の言語や文化は、受け継がれることのなかった言語や文化なのである。

先にも触れたが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。私たちは、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、和漚をワニとした訓注の意図を重視して解析を進めたいものである。

後置修飾語が普通に使われているうちは、和漚の構造がわかり、意味が取れるため、何ら問題がなかったが、後に、後置修飾語が使われなくなると、後置修飾語が使われていた時代があったことすら忘れ去られ、人々は、和漚の構造がわからず、意味が取れないため、五里霧中を右往左往するようになったものと考えられる。

『日本国語大辞典』に次のような解説がある（それぞれ、第二版、第十三巻、p. 1325、p. 1326）。

わに【鱧】〔名〕

①ワニ目に属する爬虫類の総称。（後略）

- ②古語で、鮫（さめ）、あるいはその大形の種類である鱻（ふか）をいうとされる。わにざめ。わにぶか。
- ③渡海るとき、船が動けないようにするというわにざめに、恐ろしい人をたとえていう語。

語誌 (1)爬虫類のワニは日本近海では見ることがないので、上代のワニは、後代のワニザメ・ワニブカ等の名から、サメ・フカの類と考えられている。(2)豊玉姫説話の「古事記」で、「化八尋和迹」とあるところが、「日本書紀」で「化為龍」その一書の「化為八尋大熊鰐」にあたる³⁰²⁾。また、「新撰字鏡」「和名抄」で「鰐」にワニの訓を注するが、記紀ではワニの脚については記すところがない。おそらく強暴の水生動物として、「鰐」の字が選ばれたまま、中国伝来の四足の知識が定着し、近世に至って爬虫類としての実体に接することになったものと思われる。人名、地名として、和珥、和邇、丸部（わにべ）また鰐淵などの称があるが、理由はわからない。

『古事記』の訓注は、後人が訓み間違えるのを懸念し、ワニという音声をしっかり伝えておきます、ワニ以外の訓みではいけません、という意図で書かれているのに、そのワニが理解できないまま、ズレてもよいから説明しておこう、という気持ちが仇となっていることが見て取れる。

3-2. -奴 (-怒)

ここで、仁徳天皇がある船を詠んだ歌を見ておきたい。ある船とは、今日、通常、枯野（船）と呼ばれる船で、『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 289）、加良怒（山口佳紀、神野志隆光1997. p. 304）である³⁰³⁾。

加良^ㇿ袁 から^ㇿを (枯野を)³⁰⁴⁾
志本爾夜岐 しほにやき (塩に焼き)
斯賀阿麻理 しがあまり (其が余り)
許登爾都久理 ことにつくり (琴に作り)
賀岐比久夜 かきひくや (かき弾くや)
由良^ㇿ斗^ㇿ ゆら^ㇿと^ㇿ (由良の門の)
斗那賀^ㇿ伊久理爾 となか^ㇿいくりに (門中の海石に)
布礼多都 ふれたつ (触れ立つ)
那豆^ㇿ紀^ㇿ なづ^ㇿき^ㇿ (浸漬の木の)
佐夜佐夜 さやさや (さやさや)

[荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 289]

同一の文書内では、一般に、同一の音声は同一の文字で書き記される。言い換えれば、同一の文書内では、同一の音声を異なる文字で書き記すことはない、と考えてよい。

奴は「ノ/の」とも読めるが、この歌の中では、能を「ノ/の」と読んでいるので（「ノ/の」という音声情報は能という文字情報で書き記されているので）、奴は「ヌ/ぬ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよからう³⁰⁵。逆に、奴は「ノ/の」という音声情報を書き記したもの、と誤解すると、「ヌ/ぬ」を表記する文字（漢字）がなくなってしまう。また、解析の精度を確保するには、枯野と書き換えたものではなく、原文の加良奴（加良怒）のままの漢字表記に基づいて解析した方がよい。

加良奴（加良怒）は、「からぬ/カラヌ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよからう。奴という表記は、当時の知識人には最高の選択肢だった、と考えてよいのではないか。

上述したが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。解析対象を、真偽を確かめ（られ）ないまま軽々に言い換えたり書き換えたりすることは、解析結果を誤る可能性があり、慎まねばならない。担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、歌に詠まれたのは加良奴（加良怒）、という情報に基づいて解析を行なうべきである。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポート、テキストやテクスト、グラウンドやグランドの揺れがある。関西でヘレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、フィレとも言っている。「奴」と「怒」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（或いは、できなかった）ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった（或いは、できなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。

『記』『紀』の編纂者は、語部（集団）の提供する情報を該博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことすら理解できない。周辺諸語の知識（装備）なしに、いわゆる日本語一視点の知識（装備）のみで、このような語彙に立ち向かうべきではない。

3-3. 正確な読解

さて、読めるとは何であろうか。正しい音声で読み、意味が正しく取れる、ということである。例えば、英語で、

There were three houses on the top of the mountain.

は、houses を [hausiz] と読みを間違えても、意味は正しく取れよう。しかし、例えば、中

国語で、

前面有家食堂。

は、一字一句を正確に読んでも、前にファミリーレストランがある、と解釈するなら、意味は取れていないことになる³⁰⁶⁾。

諸氏は、和邇をどの程度正確に読解しているのでしょうか。

諸氏の手法は、何とかワニに結び付けられる言葉があればそれに読み替える、というものであるが、和邇の意味が正しく取れていない、という点は共通している。そのことは、諸氏自身が薄々気付いていようし、諸氏の説を見聞きする者も薄々気付いていよう。いかなる学者、研究者であれ、pending（未決、保留）や後進に委ねる、という選択肢は、あってしかるべきである。

私たちは、解析に必要な知識（装備）を入手してきたが、そろそろ、和邇や加良奴/加良怒は何を意味するのか、和邇や加良奴/加良怒は当時の人々が何と言っていた言葉を書き記したものであるのか、が理解できるようになったのではないだろうか。

和邇や加良奴/加良怒は、古代の日本で人々が普通に使用していた言葉を漢字で表記したものと見てよいが、ここで、後置修飾語の例を少し見ておきたい。

フランス語の Mont Blanc は、前置修飾語で言うなら、英語の white mountain に相当しようし、英語には、There is something noble about him. や a friend in need is a friend indeed のような後置修飾表現もある。中国語の共通語では、おんどり、めんどり、を、公鶏、母鶏、と言うが、南方方言では、後置修飾表現で、鶏公、鶏母、と言う。

日本語では、先に例示した（2-2、『万葉集』の船）、手乃（tau-nui、手-大きい、大きな手、大型の tau。tau は、地域により、田、多、戸、と書き記されたこともある）、加良奴/加良怒、枯野、軽野（kaulua-nui、加良/枯/軽-大きい、大きな加良/枯/軽、大型の kaulua）の例がある。なお、kaulua は、唐と書き記されたこともある³⁰⁷⁾。

人名の、彦火火出見尊ひこや比売多多良伊須気余理比売みこと ひめは、長い間（意味はわかっても）構造（の発想）がわからなかったが、後置修飾型の彦-火火出見ひこや比売-多多良伊須気余理ひめと、前置修飾型の火火出見-尊みことや多多良伊須気余理-比売ひめとが混在して用いられる言語空間（社会）で双方の表現形式を取り入れたハイブリッド表現と考えられる。今日風に言えば、ミス・ブツダイとブツダイ・サンとを一語に取り込んで、ミス・ブツダイ・サンと言うようなものである。

異文化の語彙（外来語）は、異文化の語彙（外来語）の知識がなければ、正確に理解できない。例えば、「母はほっとにした」という文章は、一部に異文化の語彙（外来語）が用いられていることを知らなければ、間違った文章、手直しの必要な文章と誤解してしまう³⁰⁸⁾。また、例えば“請給我手紙”という中国語は、日本語の知識だけでは正確に理解することができないし、逆に「油断一秒、怪我一生」という日本語は、中国語の知識で何の不自由もなく理解できるが、その理解は日本語の意味とは全くズレたものとなる³⁰⁹⁾。

和邇や加良奴/加良怒は、「ワ-nui」や「カラ-nui」を書き記したもので、「ワニ」や「カラヌ」と読み、「フネ-大きい」(大きなフネ)や「フネ-二つ-大きい」(大きな双胴船)を意味する、と解釈するのが正しい³¹⁰⁾。前置修飾表現が全国を覆うようになると、和邇や加良奴/加良怒が後置修飾表現であることすら理解できなくなってしまったのである。

情報が劣化しているため、解析は難しいが、兎の皮を剥ぐことは、爬虫類のワニにできることではないし、大型船のワニ(waa-nui、船-大きい)にできることでもない。それができる動物は、大型船「ワニ」の関係者(乗員)、と考えてよいのではないか。その関係者(乗員)が「ワニ」という名前であった(「ワニ」と呼ばれていた)可能性もあろう。

奴は、nuiという音声情報を正確に反映する文字として、当時の知識人には最高の選択肢だった、と考えてよい。しかしながら、後置修飾語が用いられなくなると、人々は、奴(nui)の意味(大きい)・用法(後置修飾語)が理解できず、奴を字面(漢字の表意機能)のみで判断し、卑字ではないか、卑しめの意味があるのではないかと誤解してしまった。もうおわかりであろうが、奴は、卑字などでは決してなく、あらぬ濡れ衣を着せられた悲劇の好字であった。

元々シンプルな表記で普通に理解できた(はず)にもかかわらず、後世の人々が和邇や加良奴/加良怒を理解できなくなったことは、国情の変遷を考える上で示唆的である。日本語の基層に後置修飾語の層が存在するのである。

私たちは、和邇や加良奴/加良怒に、日本が経てきた歴史を垣間見ることができる。和邇や加良奴/加良怒は、後置修飾語の層があったことを私たちに教えてくれている。「首都大学東京」という名称も、日本人の心理の深層に今なお曖昧に受け継がれている後置修飾表現の記憶が発露した例と考えられる。

4. おわりに

言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解かねばならない。

冒頭で(1.はじめに)、私たちを含め、後世の人々は、自分が考えるほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

和邇は、数多くの人々がその考察考証に携わってきたが、未だに決定打がない。私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、和邇の意味を正確に取ることすらできない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明したりすることができないのである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識(装備)を持つことで、私たちの視点を、この説話を残した人々の視点に近づけ、先人が持た

なかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識（装備）がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、後置修飾語の構造であることがわからないまま、適当に何か書くことしかできなかったものと思われる。

今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会における言語や文化の多様性や多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。外来語は想定外だった、と言うのは、やめておきたい。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「-邇」は-nui (big, large, great, 大) という音声情報（気付かれてはいないが、意味情報「大」も含む）を漢字で書記したもので、「N(名詞)-邇」の後置修飾構造であること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101) 『古事記』の原文表記は、以下の通り（荻原浅男、鴻巣隼男1979、pp. 94-95）。

故此大国主神之兄弟八十神坐。然皆国者避於大国主神。所以避者、其八十神各有下欲婚稻羽之八上比壳之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負俗、為從者率往。於是到氣多之前時、裸菟伏也。爾八十神謂其菟云、汝將為者、浴此海塩、当風吹而、伏高山尾上。故其菟從八十神之教而伏。爾其塩隨乾、其身皮悉風見吹折。故痛苦泣伏者、最後之來大穴牟遲神見其菟、言何由汝泣伏。菟答言、僕在淤岐島、雖欲度此地、無度因。故欺海和邇〔此二字以音。下効此〕言、吾与汝菟、欲計族之多少。故汝者隨其族在悉率來、自此島至于氣多前皆列伏度。爾吾蹈其上、走乍読度。於是知与吾族孰多。如此言者、見欺而列伏之時、吾蹈其上読度來、今將下地時、吾云、汝者我見欺、言竟即、伏最端和邇捕我悉剝我衣服。因此泣患者、先行八十神之命以、誨告浴海塩当風伏。故為如教者、我身悉傷。於是大穴牟遲神教告其菟、今急往此水門、以水洗汝身即、取其水門之蒲黃敷散而、輾轉其上者、汝身如本膚必差。故為如教其身如本也。此稻羽之素菟者也。於今者謂菟神也。故其菟白大穴牟遲神、此八十神者必不得八上比壳。雖負俗汝命獲之。

201) 『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 289）、加

- 良怒 (山口佳紀、神野志隆光1997. p. 304)。
- 202) 茂在寅男1984. p. 32。
「枯野」等の解釈に外来語 (異文化の語彙) という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。
- 203) 筆名。本名、政行。
- 204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoe と説明しているが、自身のHP (夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>) では、kau = canoe としている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986 には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137) の例があるので、kau を canoe と理解するのに問題は無い。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>。Copy right (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC. に掲載されていたが、今は削除されている。
- 205) 寺川真知夫1980. pp. 141-142。引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。
- 206) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 390は、次のように注をする。
伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。
『令集解』(菅繕令・古記)に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名「速鳥」と並べて「難波伊豆の類」とも見える。
寺川真知夫1980. p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
原文：佐吉母利能 保理江己芸豆流 伊豆手夫祢 加治登流間奈久 恋波思気家牟。右、九日大伴宿祢家持作之。(同書同頁。黒丸、白丸などのルビは筆者。以下同じ)
- 207) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 437は、次のように頭注を付している。
伊豆手の舟→四三三六 (伊豆手船)。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。
原文：保利江己具 伊豆手乃舟乃 可治都久米 於等之婆多知奴 美乎波也美可母。(同書同頁)
小島、木下、東野諸氏は、窮余の策を講じるしかなかったのであろうが、歌の趣に頼る推測は、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、言語学の方法として許容されない。後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島、木下、東野諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、元々、主観の入る余地が大きく、基準として使えないことが改めてはっきりした。解析を日本語一視点のみに頼るのは、危険であり、必要性もない。
- 208) 「大雪」の「大」が、量の多さを意味するのであれば、「大雪」は、場合によっては、雪害をもたらしかねない雪である。
おお-ゆき【大雪】はげしく大量に降る雪。また、その積った雪。『広辞苑』p. 352。
たい-せつ【大雪】①はげしく降る雪。多く積った雪。おおゆき。『広辞苑』p. 1607。
「大雪」の「大」が、雪片の大きさを意味するのであれば、「大雪」は、その形状 (さらには、その美しさ) に着目した表現であり、以下のような単語とほぼ同義であろう。
たびら-ゆき【たびら雪】(ダピラユキとも) 春近くに降るうすくて大片の雪。だんびら雪。『広辞苑』p. 1670。
はなびら-ゆき【花卉雪】花卉の形をした大片の雪。『広辞苑』p. 2170。
ぼたん-ゆき【牡丹雪】大きな雪片が牡丹の花びらのように降る雪。ぼたゆき。『広辞苑』p. 2461。
ぼた-ゆき【ぼた雪】(新潟県・福井県・石川県・山形県庄内地方・大分県などで) 湿気のある大粒の雪。ぼたん雪。『広辞苑』p. 2461。
なお、同じ女性の名前でも、幸や綾は、その派生形に、小幸や小綾はないようだが、幸乃

- (野) や綾乃(野) があるのは、言語現象として興味深い。
- 209) 小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、という程度の説明に満足せず、果敢にも、歌の趣から、手乃を手よりも小型か、と誤った推測をしたが(注207参照)、これでは、恐らく、小島、木下、東野諸氏は、例えば、菊は普通(サイズ)の菊で、菊乃は大輪の菊という意味の違いや、幸は普通(程度)の幸せで、幸乃は大きな幸せという意味の違いもわからないのではないだろうか。乃は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識がなければ、正しく理解できないが、今後、船名の「手と手乃」の大小や人名の「菊と菊乃」「幸と幸乃」の違いを論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。
- 210) 『日本書紀』(巻第二、神代下、第九段、正文)に、「熊野の諸手船」という船がある。
『日本国語大辞典』は、諸手船を、「(「もろた」は諸手または両手の意) ①多くの櫓のついた早船または、二挺櫓の早船。②島根県八束郡にある美保神社の諸手船神事に用いるくり舟」と説明し、また、諸手船神事の項で、「船員船子らが樟(くすのき)をえぐったくり舟に乗り、海岸で神官が擬装した事代主神に拍手をし帆をかけて六回港内をこぎ競う」と説明している(第十九巻、p. 389)。
「諸手船」の「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、手(tau)という名の船であり(後述)、「船」は、「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助けるための類名である。そして、「諸」とは、「しっかりと結びつける」の意味である(molo. vt. to tie securely. Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 253)。全体で、オモキを嚴重に連結してできた手(tau)という船、の意であることは、おわかりであろう。tau(舟/船)という言葉(音声情報)を、伊豆の知識人(たち)は、手、という漢字(文字情報)で書き記し、島根の知識人(たち)も、同様に、手、という漢字(文字情報)で書き記した、と見てよい。
- 211) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 369は、次のように注釈を付している。
浦廻漕ぐ一津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。
熊野船着き一熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。巻第六の山部赤人の歌(九四四)にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。
原文：浦廻榜 熊野舟附 目頬志久 懸不思 月毛日毛無。(同書同頁)
青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎1980. p. 390は、次のように注釈を付している。
熊野舟つき「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であつたらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。
- 212) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. pp. 121-122は、次のように注釈を付している。
島隠り一この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。
ま熊野の船一マは接頭語。熊野は熊野船(三一七二)としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。
原文：嶋隠 吾榜来者 乏毳 倭辺上 真熊野之船。(同書 p. 121)
- 213) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 162の注。
ま熊野の小船→九四四(ま熊野の船)。
原文：御食国 志麻乃海部有之 真熊野之小船尔乘而 奥部榜所見。(同書同頁)
なお、「小」の字に「を」のルビをわざわざ振るからには、そのように読ませようという意図があると思われるが、「小石」や「小島」の「こ」に読む可能性は、検討されたのであろうか。
- 214) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 464の注。
足柄小舟一足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」(三九一)ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。

原文：母毛豆思麻 安之我良乎夫祢 安流吉於保美 目許曾可流良米 己許呂波毛倍杼。(同書同頁)

- 215) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注207) で、歌の趣に頼る推測は、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、言語学の研究方法として許容されない、と書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。

- 216) 総称の「kau-nui (狩野)」は、広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。伊豆半島にある狩野を冠する地名は、茂在氏の挙げた例であるが (茂在寅男1984. p. 20)、他にも、例えば、巨濃郡 (鳥取県)、金浦 (秋田県由利郡) がある。「kau-nui」との深い繋がりに由来するものであろう。

広島県福山市かなえちようは、江に金 (属) があることに由来するのではなく、江に kau-nui (船-大きい、大型船) があることに由来していよう。金江町かなみ金見、金江町わらえ蕪江、も、金 (属) ではなく kau-nui (大型船) が見えることに由来するものであり、江に (稲/麦) 蕪ではなく waa-lua (船-二つ、双胴船) が浮かんでいることに由来するものであろう。

また、志賀島の叶崎かなのさきや、高知県土佐清水市の叶崎かなえさきも、そこでは何かの願いが (いつも、よく) 叶うからではなく、kau-nui (船-大きい、大型船) が (いつも、よく) そこを通ることに由来するものであろう。

山口県東部にある鹿野町は、鹿がいる野原、という特色から地名ができた可能性もあろうが、錦川上流にあり、農林業を主に行っていることから見ると、kau-nui (船-大きい、大型船) の木材を産することに由来して地名ができた可能性もあろう。

人名の狩野 (かの、かのう)、加納、加能、嘉納や叶などにも kau-nui (の製造・使用に関わったこと) に由来するケースがあろう。

- 217) 地名にも、その痕跡がある。例えば、田浦 (長崎県福江市) は、田圃が浦 (の近く) にあることに由来するのではなく、tau-nui (大型船、もしくは、tau、船) が浦 (そのもの) にいることに由来する地名であらう。

また、人名の田野にも tau-nui (の製造・使用に関わったこと) に由来するケースがあろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。

- 301) それぞれ、Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 375, p. 272。

- 302) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 167。

なお、p. 130注8は、以下の通り。

座高から判断すると身長は、の意。「尋」は両手を広げた長さで、一尋は五尺または六尺。

「七咫・七尺・七尋」と七の数を用いているのは、中国的か。日本の聖数は八。

また、注12は、以下の通り。

正文では海神が尊を本土に送ると言ったとあり、この一書では大鰐に乗せて送ったとする。鰐が登場するのは、一書第三 (177頁) と記 (「海和邇」) で、一書第四では、尊が海中に行く時の乗物が鰐だとする (181頁)。またこの一書第一及び記では、豊玉姫が出産時に鰐の姿になっていたとある。「鰐」は『文選』巻五、左太沖の呉都賦「鰐魚」の劉注に「長二丈余、有四足、似鼉、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之、皆中斷、……広州有之」とあり、『和名抄』にもそれを引き「似鼉」と説明する。これは亀甲類の認識であるが、その形態や性質からみれば爬虫類のワニのようでもある。しかし、実物と文字とは一致しない点が多く、しばらくサメ (ワニザメ) に当ると解しておく。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏が、「尋」は両手を広げた長さ。

「八尋」で長い意、と注を施したことは、誤りではないが、意味がない。窮余の策であることは、理解できるが、この手法では、如何なる数値でも難なく解けることになる。モルヒネと同じで、手の施しようがない時にのみ使うものである。実際のところ、小島憲之、直木孝

次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏には手の施しようがなかったのであろうが、そうであったとしても、もう一つの方法がある。先の方法ほど解けない苦痛を除くことはできないが、ペンディング（後日の解に待つ）という方法である。これであれば、解けない苦痛は相当程度軽減され、誰でも書けるようなさして意味を持たない注を書かずに済むのである。同所の、「鰐」はサメ、も間違いであるが、同じ間違いでも、注12のように、しばらくサメ（ワニザメ）に当ると解しておく、と断定しない言いの方がましであったが、今後は、断定するしないで悩むこともない。

- 303) 荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 288は、「枯野」に次のように注釈を付している。
 応神紀・五年の注記に「軽野^{かる}」の訛語という。速く走る義か、あるいは船材の産地による命名か。良い船材を産した伊豆国の地名としては静岡県三島市修善寺町中狩野の地か。
 山口佳紀、神野志隆光1997. p. 305は、「枯野」に次のように注釈を付している。
 船の名としての意味は未詳。『播磨風土記』逸文に仁徳天皇の飲み水を朝夕運んだ「速鳥」という名の船の話がある。それと関連させつつ、「枯」は「軽」に通じ、船の速さをいうとみる説があるが、『紀』の用字法と合わないので従えない。
- 304) 「からぬを」という音声情報を書き記したもので、「カラヌを」の意、と理解するのが正しかろう。
- 305) 「万葉集」では奴はヌ（甲乙はない）にしか使わない。（中西進『万葉集 全訳注原文付(一)』講談社、1978年、p. 26）
 付言すれば、平仮名・片仮名ができた過程から見ても、「奴」は、草書から「ぬ」、右側の旁から「ヌ」ができたように、「ヌ/ぬ」が主体である。
- 306) 前に一軒食堂がある、の意。
- 307) 例えば、津軽（軽 kaulua が利用する津、の後置修飾表現）vs 唐津（唐 kaulua が利用する津、の前置修飾表現）のようなケースがある。
- 308) 母は熱いコーヒーをもらうことにした、の意。
- 309) 中国語の意味は、それぞれ、「どうか私にトイレトペーパーを下さい」「油（の供給）が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます」である。
- 310) 漢字が表意で用いられているのか、表音で用いられているのか（日本語のカタカナのような使い方しているのか）、はケースバイケースで見るとはわからないであろうが、中国語の参考例を少し挙げておきたい。
 例えば、熱狗では、漢字は表意で用いられ、字面が示す通り、熱い犬、ホットドッグ、の意である（漢字の読み rèngǒu には意味がない）。一方、哀鳳では、漢字は表音で用いられており、āifēng という読みの意味がある（字面が示す、哀しい鳳には意味がない。アイフォン、iPhone。アップル社の携帯電話）。

参考文献

< 日 文 >

- 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎1980。『萬葉集三（新潮日本古典集成第41回）』新潮社。
- 荻原浅男、鴻巣隼男1979。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。
- 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。
- 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集7）』小学館。
- 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集8）』小学館。
- 小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。
- 寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

三浦佑之2002。『口語訳 古事記 [完全版]』文藝春秋。

茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記 (新編 日本古典文学全集1)』小学館。

< 日文・辞書 >

『広辞苑』新村出、第五版、岩波書店、1998年。

『日本国語大辞典 第二版』日本国語大辞典刊行会 第二版 編集委員会、小学館国語辞典編集部、小学館、2001年。

< その他 >

『辭源 (修訂本)』廣東、廣西、湖南、河南辭源修訂組、商務印書館編輯部、商務印書館、1915年。

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

[付記]

本稿は、平成25年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(こうとうじ 中国学科)

2013年11月15日受理